

吹田市と大阪大学の連携強化に向けて



大阪大学総合学術博物館教授。大学院理学研究科化学専攻教授を兼務。大阪大学理学部卒業後、同大学大学院理学研究科博士課程を経て、理学博士を取得。専門は物理化学。ミクロな空間における分子運動を研究している。最近では文化財科学にも挑戦中。

平成17年4月1日、総合学術博物館長に就任。今日に至る。

吹田市民の皆さんのうち、大阪大学に博物館があることをご存知の方は少ないと思います。2002年に、大学所蔵の学術標本資料を整理・保管し、有効に再活用する目的で、大阪大学に総合学術博物館の設置が認められました。豊中地区の共通教育本館1階に小さな常設展示室を開設するとともに、学内外で企画展・特別展を開催し、今日に至っています。

その間、2004年から阪大も国立大学法人へと変化しました。外部から見ると、それまでの国立大学との違いは気づかないかもしれませんが、それ以前は、学生の教育・研究指導を通じて人材を育成し、かつ最先端研究を推進することで、社会貢献することが大学の主要な役割とされてきました。しかし、それだけでは不十分で、大学における教育・研究の成果を論文や学会で発表するばかりでなく、もっと積極的に地域社会に還元する努力が大学に求められるようになりました。そのような時流の中、2004年10月には大阪大学と吹田市との間で、「連携協力に関する基本協定書」も交わされています。

本年、吹田市立博物館では春季特別展「吹田の景観を掘りおこす2」が開催される予定と伺っています。その際、阪大博物館が所蔵する「マ

チカネワニ」の実物化石の一部を展示し、50万年ほど前の千里丘陵のゾウとワニのいた森をイメージする催しが計画されています。両博物館として初めての連携事業になりますが、学術標本資料の有効活用として大いに期待しています。

夏には、阪大博物館に念願の新展示場が阪急石橋駅から徒歩5分くらいの便利のよい場所に完成する予定です。懐徳堂・適塾に始まる阪大の系譜や、千里丘陵などの地理・歴史に関する展示などを予定しています。カフェも併設しますので吹田市民の皆様もぜひ気軽にお立ち寄りください。



本年8月に完成予定の博物館新展示場のエントランス完成予想図。阪急石橋駅から徒歩5分のところにある旧医療短大本館（3階建て）を全面的に改修し、バリアフリーの博物館施設として、地域連携の拠点にする。

大阪大学総合学術博物館
館長 江口太郎

平成19年（2007年）度 春季特別展

吹田の景観を掘りおこす2

平成19年（2007）4月21日（土）～6月3日（日）

春季特別展の準備にあたり吹田地学会にご協力をお願いしました。そこで、吹田地学会の会員の方にこの展覧会に寄せる期待や思いを語っていただきました。

吹田の地形は大きく2つに分けられます。北に千里丘陵があり、南には沖積平野が広がっています。こうした地形はいつ頃、どのようにしてできあがったのでしょうか。

林：千里丘陵を形成しているのは約300万～約30万年前にできた大阪層群という地層群で、沖積平野の下にもこの地層群が分布しています。もっと広い地域でみれば、大阪盆地とその周辺の盆地にも分布していて、淡水域や海に堆積した泥、砂、礫などの地層が幾重にも重なったものです。およそ80万年前から六甲変動と呼ばれる地殻変動が激しくなり、これにともなって千里丘陵が姿をあらわし始めたようです。

安部：大阪層群の下には、神戸層群というさらに古い地層があり、千里丘陵では豊中市の島熊山付近に顔をのぞかせています。

秋元：大阪層群の中には約50層もの火山灰層が挟まれています。火山灰層は泥層や砂層などと比較して短時間に堆積するので、優秀な鍵層となります。大阪層群の中で特に有名なものが約100万年前のピンク火山灰と約90万年前のアズキ火



林 隆夫

1946年生。大阪市立大学大学院修了。理学修士。地質学専攻。吹田地学会事務局長。大阪府立茨田高校教諭。

山灰で、それぞれ火山灰層の色から名付けられました。

古い地層や環境を調べることにはどのような意義があるのですか。

秋元：ある人の人物像を知りたいとき、履歴書や過去の経歴をみればその人の全体像がわかります。それと同じように自然の全体像を理解しようとする場合

には、自然の歴史を調べるのが一番の近道となります。地下に埋もれた地層を知ることには、その地域の発達史を知ることだけではなく、その将来を科学的に考えることにもつながるわけです。

なぜ、吹田地学会をつくられたのですか。

秋元：現在の吹田は開発が進み、かつては千里丘陵のあちらこちら

で見られた地層や火山灰層を観察できる場所も急速に消えていきました。

安部：万博が開催される以前には、樫切山や青葉丘の付近でも地層の露頭が観察できました。

林：大阪層群の研究の第一人者である市原実先生がアズキ火山灰層を最初に発見されたのもこの千里丘陵でした。その場所は、今は万博公園の太陽の塔の土台の付近で、もう見られなくなっていきます。

秋元：千里丘陵は大阪層群研究の絶好のフィールドだったわけですが、このように古い地層や火山灰層の観察ポイントがなくなっていくという状況の下で、千里丘陵の大阪層群を見学することすら不可能になるという危機感を持ちました。また、研究を将来へと継承させるため、吹田地学会を3年前に立ち上げました。市原先生は吹田にお住いであったこともあり、会長への就任をお願いしました。しかしながら、残念なことに先生は、昨年お亡くなりになりました。

吹田地学会ではどんな活動をしているのですか。



安部 亮介

1937年生。島根大学農学部卒業。農業工学を専攻。吹田地学会副会長。吹田歴史文化まちづくりセンター理事。『地学研究』元編集長。

林：現在残されている観察ポイントの保存運動もそのひとつでしょうね。

今、吹田市内で火山灰層などの地層が観察できる場所はどのくらいあるのでしょうか。

秋元：吹田地学会のメンバーがこの博物館の前でピンク火山灰層の露頭を発見し、博物館にそれが観察できるように整備を提案しました。今は説明板が設置されています。

林：千里北公園では大阪層群の露頭がかなり良好な状態で残っています。

安部：つい最近では、万博公園の外周道路の脇でアズキ火山灰層の露頭を発見しました。

皆さん、科学少年としての夢を育て、青年時代から地質学のフィールド調査に精力を注いだったのでしょね。

安部：子どもの頃、『動く実験室』や『子供の科学』といった科学雑誌がたくさんありましてよく読んでいました。それには付録がついていて、実験やら模型作りに夢中になっていました。

林：グリコのおまけにも科学的なものがついていましたね。私は神戸に住んでいたので、少年時代には近くの山へ行っては「けもの道」を歩いたり、ドングリを採ったりしていました。地質学を始めたのは学生時代です。その後、高校教員になってからも、仲間と一緒に大阪南部の泉北丘陵や琵琶湖周辺の丘陵地をかなり歩きまわっていました。

秋元：私は高校教員時代には、日曜日など、生徒を連れて阪神間や西六甲などをフィールドに地層や自然の観察に歩きました。

今回の展示では、摂津国ができる以前、5世紀頃までの時代を取り扱います。

安部：大阪平野は、縄文時代には海で、「河内湾」がありました。その後、淡水化して湖になり、それが土砂の堆積のために埋まって、今の景観に近くなったのです。人々は、このような環境変化に対して、漁業を盛んにして貝塚をつくり、弥生時代以降、稲作や土木工事を行って沼地を水田に変えることによって、日本文化の中心地の一つに育てていったことが、地質や地形の調査でわかっているのです。

それは、考古学の知見と見事に一致しています。最後にこの展覧会に対する期待と要望を伺いたいと思います。

秋元：最近では学校の授業でも理科系の科目が重要視されず、高校でも「地学」の授業のない学校が多くあります。子どもたちが地学の知識に乏しくなっていることに憂いを感じています。ただ単に昔のことを知るというだけでなく、もっと大きなスケールで、まわりにある自然や環境について考えられる展示になればいいと思っています。

林：自然や環境保全への関心は、今多くの人たちが持っています。景観というテーマはそういう意味ではおもしろいと思います。ただ、昔の景観を復元するというのは難しい。それを少しでもお手伝いできるような、具体的なデータや資料を提供したいと思います。

安部：景観は過去からのつながりの上に成り立っています。今の景観は未来の景観へと続いていくのです。これからの吹田のまちづくりへの一石となる、子どもたちにもわかりやすいおもしろい展示にしたいですね。

どうもありがとうございました。

(インタビュー 高橋真希)



秋元 宏

1935年生。大阪市立大学大学院修了。理学修士。地球科学専攻。吹田地学会副会長。模型と画像で歴史を語る研究会代表理事。



博物館前のピンク火山灰層の露頭
(写真中央やや右の白い部分)

景観復元のでがかり

～特別展「吹田の景観を掘り起こす2」展示資料より～

アケボノゾウの化石

何100万年前、何10万年前の自然環境は、地下に埋まっている動物や植物の化石を調べることでわかります。千里丘陵を構成する大阪層群から今では絶滅したアケボノゾウ、シガゾウ、トウヨウゾウ、マチカネワニなどの大型動物の化石が出土します。千里丘陵が地殻変動によって隆起する前には、ゾウやワニが生息する森林や湿地の風景があったのです。

アケボノゾウは約250万～約60万年前のステゴドンというゾウの種類の仲間で、約400万～約300万年前にいたシンシュウゾウから進化し、日本列島にのみいたゾウです。体高は1.6～2mほどで小型ですが、体高に比べ体長が長く、胴長短足のゾウでした。また、牙も1.5～



アケボノゾウの切歯・切歯骨の一部（出口町出土）

1.8mで、体長の割に長く、外側にねじれているのも特徴です。アケボノゾウの化石は、吹田では出口町で切歯（牙）・切歯骨の一部（上の写真）と臼歯、佐竹台で臼歯が見つかっています。（高橋真希）

ナイフ形石器・有舌尖頭器

約20,000年前の日本列島では、ナイフのような形をした石器が盛んに作られ、物を切ったり刺したりする道具として使われていました。大阪周辺のナイフ形石器は二上山で産出するサヌカイトを翼に似た横長の破片（翼状剥片）に割って一辺に刃を加工しています。こうした作り方は瀬戸内海沿岸地域で広く行われ、「瀬戸内技法」と呼ばれています。吹田では吉志部瓦窯跡下層で見つかった約18,000年前のナイフ形石器が最も古く、岸部～垂水にかけての地域で5ヶ所の遺跡でナイフ形石器が出土しています。

有舌尖頭器は旧石器時代晩期に流行した石器で、先端を尖らせ、反対側の基部に舌状の突起があります。この突起部分を槍の柄に差し込んで装着しました。縄文時代の初め頃



左：ナイフ形石器（吉志部瓦窯跡下層）
中：有舌尖頭器（吉志部遺跡）
右：石鏃（吉志部瓦窯跡下層）

（約13,000年前）には弓矢が登場し、狩猟具として普及していきます。矢じりには石鏃を用いたため、以後、有舌尖頭器は急速に使われなくなりました。（高橋真希）

縄文時代の貝

五反島遺跡は南吹田5丁目に所在する弥生時代～中世の遺跡です。発掘調査の際に、多量の貝が出土しています。

五反島遺跡出土の貝は主に現地表下約6mの暗灰色シルト層から出土し、13種類で合計約1,130点が確認されました。梶山彦太郎氏の調査によると、これらは海水産、汽水（淡水の混じった海水）産の貝で、汽水域の干潟などに生息するオオノガイとマガキが大部分を占めています。また、現在日本近海ではほとんどみられないチリメンユキガイ（暖海性の二枚貝）の出土が注目されます。出土状況から貝塚などの人為的なものではなく、自然に形成されたものと考えられます。以上のことから、これらの貝は、現在よりも温暖な干潟などの環境で形成され、その時期は縄文前期（約6,000年前）の縄文海進の頃である可能性があります。（西本安秀）



五反島遺跡出土の貝

- | | |
|------------|-------------|
| 1 ツメタガイ | 8 サルボウ |
| 2 アカニシ | 9 カガミガイ |
| 3 マクラガイ | 10 マテガイ |
| 4 ヒロオビヨウバイ | 11 ウラカガミ |
| 5 オオノガイ | 12 チリメンユキガイ |
| 6 マガキ | 13 アサリ |
| 7 ハマグリ | |

古墳時代の鍬

垂水町3丁目一帯に広がる垂水南遺跡では、4～5世紀頃の大きなムラの跡が見つかっています。人々は平地の中のわずかな高まりに竪穴式住居や高床式建物を建て、その周囲には水田や湿地が広がっていました。水田は矢板の列で畦道を区画したり、灌漑用水路には堰を設けるなど高度な技術で営まれていました。

右の写真は、土を耕す道具である鍬の刃の部分で、刃先は欠けていますが、残っている部分で55.3cmあります。上端よりやや下方にはひもなどで柄を着けた痕が残っています。この鍬は刃先が二股に分かれていることから又鍬といい、掘りおこした土の塊を掻き砕くものとも考えられています。又鍬は遅くとも弥生時代後期には使われ始め、代かき用の馬鍬が登場する6世紀以降には徐々に姿を消していきます。（高橋真希）



鍬（垂水南遺跡）

アボリジニとワニの話

熱帯にあるオーストラリア北部のアーネムランドの海には、イリエワニ（*注）がすんでいます。ときに体長が7mにも達し、雨期になると産卵のために川を上って淡水域にまで来て、ヒトや動物を襲うのです。飼い犬がおそわれたというのはしょっちゅう聞くのですが、捕らえて腹を裂いたら人の下半身が出てきたというおそろしい話も聞きました。

ところが、アボリジニのクラン（氏族）のなかには、ワニを自分たちの先祖だと信じている人びとがいるのです。かれらは、さまざまな精霊が文化・土地・人びとを創造した「ドリーミング」と呼ばれる神話世界をもち、儀礼の歌や踊りや絵をとおして、精霊たちと交流しています。

中部の神話では、地中から出現したワニの精霊が、地面をはいずりながら海に向かい、その跡がリバプール川になったと、大河の起源を説明しています。

東部の神話では、ワニは、もっと具体的でおもしろい役割をはたしています。マダルパ・クランの精霊バルは、火の創造神ですが、「妻が調理中に夫婦げんかをはじめ、妻の投げた火が小屋に燃え移って背中にひどい火傷をおった。あわてて海に飛び込んで傷をなおしたが、居心地がいいのでそのまま海にとどまり、ワニの姿になった」と語られるのです。これは、ワニの背中がウロコ状であることを説明する起源神話であるとともに、ウロコ・火傷・火、という連想からワニを火の神と考えたといつてよいと思います。

このように、神話に現れるワニは、中部では「陸と海」、東部では「水と火」という両義性をもっています。これはイリエワニが淡水と海水を行き来する強烈な存在観のある動物だからでしょう。（国立民族学博物館教授 久保正敏）

（*注）アーネムランドには、クロコダイルと呼ばれる淡水生と海水性のワニがいて、イリエワニは海水性です。



ワニのドリーミングを描いた樹皮画
中央アーネムランド
国立民族学博物館所蔵



火の起源神話を描いた樹皮画
東アーネムランド・マダルパ族
国立民族学博物館所蔵

火の神話にはワニとともにジュゴンが登場する。二人の男にモリを打ち込まれたジュゴンは、昔ワニが作った火が燃える岩の下に逃げた。モリに結んだロープに引かれたカヌーは、岩にぶつかって転覆し、二人の漁師は溺れ死んだ。そこで人びとは砂浜で葬礼の場をカヌーの形に作った。今でもマダルパの人びとがカヌーの形をした葬儀場を作るのは、こうしたわけである。この樹皮画には、ワニ、ジュゴンを追うカヌー、葬儀場が描かれている。

大阪万博展にむけてスタート

—第1回秋季特別展実行委員会より—

昨年の千里ニュータウン展に引き続き、この秋の特別展も、市民委員を募集し、市民とともに企画し創りあげていく展覧会を目指し、活動を開始しました。2月10日に第1回の実行委員会を開催し、委員の方々が万博に関する思い出や、万博展でどのようなことを表現したいといった意見を熱く語られました。さらに、今回の募集にあたって「万博展への期待や応募の動機」を提出していただき、バラエティに富んだご意見をいただきました。

ここでは、それらのユニークな内容の一部をご紹介します。大阪万博展がどんな姿をあらわすのかを読者の皆さんに想像し、期待してもらいたいと思います。

委員の方々のご意見で一番多かったのは、やはり大阪万博へのそれぞれの思い出でした。万博に何度も訪れた方、万博を見れなかった方、まだ生まれていなかった方、それに万博当時の年齢によってさまざまな見方や感じ方があったことがうかがわれました。

当時小学5年生であった委員は、大阪万博がその後の人生に大きな影響を与えたと述べられ、「あのチンプンカンプンで、シツチャカメツチャカで、なんだか楽しくて面食らうような感覚を、再現できればと思う。それは地元民にとっては時空を超えた『自分探し』の旅になるはずだ」と表現されました。

大阪市の職員として万博関連事業に携わっておられた委員は、交通輸送施設の整備などのさまざまな事業を評価され、万博展にぜひ関連事業も組み込んで欲しいと主張されました。

当時生まれていなかった委員の応募動機のひとつは、太陽の塔の存在とそれを創った岡

本太郎氏への興味からであったと述べられました。

また、ある委員は万博の思い出を外国人との交流（特にアジアやアフリカの人々）であったとされ、史上最大のお祭りとして表現されました。

大阪万博の影の部分も見逃すことはできないと主張された委員もおられます。高度経済成長や科学技術の進歩が、公害という形で露呈し始めていた時代に、「人類の進歩と調和」というテーマの「調和」の部分があまり生かされていなかったと振り返られました。

千里ニュータウン展で盛り上がった市民による博物館活動への新しい風を大きな収穫として、再び委員に手を挙げていただいた方々は、もうすでに魅力ある企画を思い描いておられるようです。

ともあれ、スタートしたばかりの大阪万博展の活動がどのように展開していくのか、どのような展覧会・イベントへ花開いていくのか、温かく見守っていただきたいと思います。大阪万博の地元吹田ならではの、柔軟な発想を発揮される市民委員の、楽しい展覧会になればと期待しています。
(田口泰久)



第1回実行委員会会議風景

催し物のご案内

平成19年(2007年)度春季特別展 「吹田の景観を掘りおこす2」関連行事

講演会&トーク

各回とも講演の後、当館館長とのトークがあります。

4月22日(日) 午後2時～3時30分

「鬼道につかえた卑弥呼」

大阪府立弥生文化博物館館長 金関 恕氏

4月29日(日) 午後2時～3時30分

「近畿にいた絶滅動物」

兵庫県立人と自然の博物館研究員 三枝春生氏

5月13日(日) 午後2時～3時30分

「絶滅に瀕した動物たち」

天王寺動植物公園事務所飼育課長 長瀬健二郎氏

5月20日(日) 午後2時～3時30分

「ワニと暮らす人々 - アボリジニの事例 - 」

国立民族学博物館教授 久保正敏氏

5月27日(日) 午後2時～3時30分

「地質時代の吹田の風景」

吹田地学会
博物館講座室 先着120名 申し込み不要 聴講無料。

歴史講座&博物館トーク

「シリーズ吹田の景観」

は歴史講座、は博物館トーク

4月28日(土) 午後2時～3時

「中世吹田の風景」

- 摂津国垂水庄差図より -

当館学芸員 池田直子

5月19日(土) 午後2時～3時30分

「村落景観と不思議空間」

- 民話と民俗地図を題材に -

当館学芸員 藤井裕之

5月26日(土) 午後2時～3時30分

「古墳時代の大開発と景観」

当館学芸員 高橋真希

6月2日(土) 午後2時～3時30分

「絵図から景観を読む」

当館学芸員 田口泰久

6月3日(日) 午後2時～3時

「北摂の山寺 - 信仰と美術 - 」

当館学芸員 滝沢幸恵

博物館講座室 先着120名 申し込み不要 聴講無料。

実験!体験!親子で親しむ考古学

5月3日(木) 午後1時～4時

ペーパークラフトで竪穴式住居を作ろう

5月4日(金) 午後1時～4時

弓矢を作ろう

5月5日(土) 午後1時～4時

勾玉を作ろう

5月6日(日) 午後1時～4時

縄文仮面と土偶を作ろう

対象 小学生とその保護者 定員30組

ハガキまたはファクシミリに講座名、参加者の住所、氏名、年齢、電話番号を書いて博物館まで。参加無料。申込締切4月18日(水)必着。多数抽選。

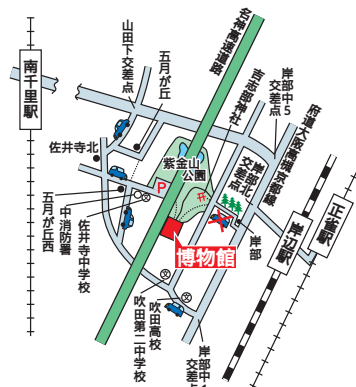
現地見学会

5月12日(土) 午後1時～4時

市内の地層露頭観察ができる場所を訪ね、現地で千里丘陵のなりたちなどの解説を行います。小雨決行。

講師 吹田地学会の皆さん

定員 35名 ハガキまたはファクシミリに講座名、参加者の住所、氏名、年齢、電話番号を書いて博物館まで。参加無料。申込締切4月27日(金)必着。多数抽選。



交通案内

JR吹田駅・阪急千里線吹田駅から

桃山台駅ゆき・山田榎切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分

阪急山田ゆき・千里中央ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

JR吹田北口から

五月が丘南ゆきバス「五月が丘西」下車徒歩7分

阪急千里線南千里駅から

JR吹田ゆきバス 系統「佐井寺北」下車徒歩10分

JR東海道本線岸部駅下車徒歩25分

車でのご来館は佐井寺北・五月が丘方面からお願いします。

開館時間

午前9時30分～午後5時

休館日

月曜日、祝日の翌日

12月29日～1月3日

<http://www.suita.ed.jp/hak/>

吹田市立博物館だより 第29号

平成19年(2007)3月25日発行

吹田市立博物館

〒564-0001

吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL.06(6338)5500

FAX.06(6338)9886